

医療法人済恵会 広報誌

オアシス82号

広報誌オアシス 制作 広報委員会
〒379-0116 群馬県安中市安中3532-5
Tel (027) 382-3131 FAX (027) 382-6568

2018年 謹賀新年

医療法人 済恵会
理事長

須藤病院、老健めぐみ、ケアハウスジョリエやなせ、デイサービスさくら、介護付き有料老人ホームななかまど、などご利用の皆さま、また関係者の皆さんあけましておめでとうございます。2018年が皆さまにとりまして素晴らしい年となりますよう祈念しております。

昨年は北朝鮮問題が大きくクローズアップされ、戦争の危機などと言われておりますが、平和的な解決を強く望んでおります。戦争は決して行ってはなりません。私たちの世代は文字通り“戦争を知らない子供たち”で育ち70年間平和国家で過ごすことが出来ました。これも戦後で苦勞をされた先人たちのお陰です。医療介護の充実などということは日本が平和であってこそ願いです。この平和が永遠に続くことを強く願っております。

さて今年の法人内の目標について述べてみたいと思います。キーワードは“コミュニケーション”です。当法人も大きくなりまして、300人を超える従業員が在籍しております。

医療職は専門職の集まりです。医師、看護師をはじめ薬剤師、理学療法士、放射線技師等々多くの専門職の協力によって成り立っております。一人の患者さんの情報をすべての職種が共有することは決してやさしいことではありません。当院のように電子カルテを用いていてもなかなか難しいものです。重要なことは記載しなければ伝わりません。しかし書いてあっても読まなければ伝わらないのです。読むという事は意外に情報が伝わりにくいものです。読んだ人の関心がなければ素通りしてしまいます。表現の仕方が悪ければ理解不能です。電子カルテに記録に残すという目的と共に、やはり口頭で伝えることも非常に大事なことと思います。

2015年ラグビーワールドカップで日本チームを率いたエディー・ジョーンズコーチが日本の高校生を指導する番組がありました。ご存知のように彼の指導により、日本チームは南アフリカに勝利するという番狂わせを演じたわけですが、彼の指導で最も重要と思われたのが、選手間で細かいコミュニケーションをしっかりとることでした。自分は相手チームの選手Aにタックルに行くから選手Bのマークは頼む、など具体的なコミュニケーションを瞬時にしっかりと行うという事です。

これまでとかく言われていた、単に練習中声が出ていないなどということは、強くなるためには意味がないということです。

医療現場でも患者さんの認知度、動ける能力、疾病の種類など、今必要な情報を的確に伝えなくてはなりません。例えば入院直後は患者さんの把握が十分ではなく転倒事故なども起こりやすい傾向にあります。最初に接した外来の看護師が家族からの家での生活などの情報収集をしっかりと行い、また患者さんから受ける印象を的確に伝えることにより、入院直後の受け持ち病棟看護師は飛躍

的にケアがしやすくなります。この伝える方法は的確な言葉です。言葉を出し惜しみしてはなりません。的確な声掛けにより連携がしっかりと取れば仕事は正確になります。

百聞は一見に如かず、ということわざがありますが、私は百読は一聞に如かず、ということをご提案したいと思います。今年度の全職場の行動原則とし、各セクションがしっかりとコミュニケーションをとることを今年度の目的とします。

今年もよろしくお願いいたします。

理事長 須藤英仁

年頭にあたり

新年明けましておめでとうございます。年頭にあたり一言ご挨拶申し上げます。

今年2018年は、医療・介護にとって、とても重要な年であると考えております。それと言いますのは、4月に診療報酬の医療・介護の同時改定があるからです。診療報酬改定とは何か？と言いますと、簡単に言えば「病院の立ち位置」を決める重要な事です。当院は現在一般病棟7：1看護配置です。2023年を目標に、厚生労働省は7：1看護配置の病棟を削減するよう診療報酬改定を行ってまいります。当院は「地域に根ざした医療提供・住み慣れた場所で急性期から慢性期まで住民の方々の医療を守る」事を使命に、院長の経営方針で急性期病棟を維持してきました。2018年度もその方針は変わりません。一般

病棟は手術を行う患者様も多く、重症患者割合は30%に及びます。また高齢化社会に伴い、認知症の患者様の入院も増加しています。その中で患者様の安全を守り、職員の安全を守るためには看護師の配置数を減らすことはできません。そして現状を維持していくためには、各病棟の連携が重要となります。急性期の時期から、早期に治療後の見込みを決定し、退院又は回復期病棟・療養型病棟への転棟を検討し対応していく必要があります。

そこで年頭に当たり皆様に当院の病棟を理解していただきたく、各病棟の特徴を紹介いたします。今年もどうぞよろしくお願い致します。

看護部長 佐藤 明美



回復期リハビリ病棟より

回復期リハビリテーション病棟では、脳梗塞や大腿骨頸部骨折、圧迫骨折などで急性期の治療を受けた患者さまに、自宅退院を目標に日常生活動作の能力の向上や寝たきり防止、具体的には、移動、食事、トイレ、着替え、入浴、歯磨きなど病院での生活そのものがゴールに向けての練習として過ごして頂いています。リハビリはもちろん、これらの身の回りの動作を出来る限り自分で行い、活動的に過ごして頂けるようにスタッフ一同サポートしていきます。元気になって自宅に患者様が笑顔で退院されること、退院後に顔をみせに来てくれることが何よりの楽



しみです。まだまだリハビリテーション看護・介護の視点で患者さまを見る目は十分とは言えませんが、これからもスタッフ一同、日々努力していく所存です。今後ともよろしく願いいたします。

回復期病棟 看護師長 大堀

療養病棟より

療養病棟は急性期の治療が落ち着いたが、持続点滴や気管切開、人工呼吸器の管理など、医療処置が必要な患者様の継続治療と日常生活援助を中心に看護を行っています。患者様及びご家族が、安心して療養生活を送ることができる病棟です。

長期入院の患者様も多く、人工呼吸器を装着されている患者様も医師の呼吸管理のもと、定期的に機械浴を実施しています。食事や排泄、清潔の保持などの日常生活においても、スタッフ全員全力で取り組んでおります。



また患者様だけでなく、ご家族様との関わりも大切に考えております。どのようなことでも気になりましたらお声をかけてください。迅速に対応させていただきます。今後ともよろしく願い致します。

療養病棟 看護師長

一般病棟より

新年明けましておめでとうございます。一般病棟の紹介と取り組みについてお話ししたいと思います。

当院の一般病棟は病床数48床の急性期病棟で、外科、内科、整形外科、脳外科、循環器科など様々な患者様の入院対応をさせていただいています。急性期～終末期まで様々な状況の患者様や、認知症状を有する患者様などを、同時に対応する必要もあり、日々、努力して参りました。その中で、患者様の安全に対する取り組みについてお話しします。

皆さんは、昨年9月より当院で発行させていただきました「私たちの最優先事項」というパンフレットはお読みになられましたでしょうか。これは患者様の安全のために私たちが実行することが集約されているものです。医療提供においては、患者様の安全を最優先に考えなければいけません。しかし、十分に注意をしても、入院中の転倒や薬剤の管理不足は年間数十件と発生しているのが現状です。患者様が安心して治療を受けることができる環境を整えることが課題となっていました。そこで、私たちは「安全ラウンド」と称した、安全を守るための行動を全入院患者様に毎日、1日2回実施するようにしています。安全ラウンドでは、ベッドの位置や高さ、ナースコールの位置、点滴の異常や輸液ポンプなどの機械類の点検など様々な点検を



行い、異常があれば直ちに修正するように指導・伝達しています。点検によって機械類の異常や点滴刺入部の異常に対し、早期の対応ができることもあり成果があったと実感しております。また、安全ラウンドにおいて患者様より「いろいろ見る必要があって、大変だね。でも、安心して入院できるよ。」と仰っていただき、私たちの行動の励みとなっております。今後も継続して実施していきます。入院された際には、“青いゼッケン”の看護師が病室に回ってきましたら、温かく・厳しい目で見ていてください。

これからも、私たちは「患者様の安全を守ること」は「病院の未来を守ること」だと思い、行動していきます。そして、「病院の未来を守ること」は「安中地域の医療・介護」を守ることに繋がると考え、全力で参りますので、今年もよろしく願います。

一般病棟看護師一同

チーム医療実習

群馬大学医学生を迎えて

平成29年8月28日～9月8日の期間群馬大学医学部2年生の3名が、「チーム医療実習」に、介護老人保健施設めぐみ・須藤病院へ来られました。「チーム医療実習」とは、医療に従事する多種多様な医療スタッフが、各々の高い専門性を前提に、目的と情報を共有し、業務を分担しつつもお互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供する為の実習です。実習を終えた感想をご紹介します。

【佐復千春さん】



実際の外来や回診をはじめ、多くの職種を見学させていただき、それぞれの職種で相互に連携し合って医療を支えていることを学びました。この経験を活かし、包括的で身近な医療を提供できる医師になりたいと思います。お忙しい中、私達の為に、有意義な時間を下さり、本当にありがとうございました。

【吉山敦さん】



須藤院長をはじめとする、病院・施設の方々、2週間という短い間でしたが大変お世話になりました。有意義な時間ばかりで非常に勉強になり、医療という職種の難しさを改めて実感するとともに早く医者になりたいと強く感じました。このモチベーションを無駄にせず、当面の間は勉強に励みたいと思います。貴重なお時間を頂き、有難うございました。